

平成 28 年度
全国公立大学学生大会
LINK topos 2016
in Kitakyushu
(公立大学学長会議同時開催)
報告書

期日 平成 28 年 10 月 8 日 (土) ~10 日 (月)

会場 北九州市立玄海青年の家

北九州まなびと ESD ステーション

北九州市立大学 北方キャンパス



公立大学学生ネットワーク

LINK topos

目次

はじめに

I 平成 28 年度全国公立大学学生大会 LINK topos の概要

- 1 大会プログラム
- 2 活動内容とその成果
 - 2.1 事前交流会
 - 2.2 シンポジウム
 - 2.3 ワークショップ
 - 2.4 学長・学生合同セッション及びランチ交流会
 - 2.5 大会を通して
- 3 参加者の対象と推移
- 4 全国公立大学学生大会の今後の展望について
- 5 謝辞

II 補足 ー公立大学学生ネットワークのこれまでの歩みー

- 1 公立大学学生ネットワーク結成の背景とその概要
- 2 過去の全国公立大学学生大会 LINK topos について
- 3 これまでの取り組みと成果

はじめに

教育基本法には、大学の役割として「教育」「研究」「社会貢献」が明記されており、この中の社会貢献については地域貢献に関する事業が各大学でよく取り上げられ、話題にされている。

公立大学は、地方自治体によって設置されていることから、大学が設置されている地域社会における知的・文化的拠点として中心的な役割を担っており、なかでも地域貢献が重要課題として大切にされてきた。また、人口減少と少子高齢化が急速に進展していくことが予想されている将来に、社会・経済・文化・産業・医療・福祉等における諸課題に果敢に取り組むことが期待されている。

全国の公立大学の学生で組織された公立大学学生ネットワークをベースにして、平成 25 年度から「全国公立大学学生大会 LINK topos」が開催されてきた。この学生大会には、各大学で様々な地域貢献活動に参加している学生が参加し、各大学の地域貢献活動の事例や地域の知の拠点としての公立大学の役割についての情報交換を行い、そのあるべき姿について議論されてきた。平成 26 年度の大会からは学生だけでなく、教職員にも参加を呼びかけ、学生・教員・職員が、地域貢献活動やその課題について共に議論することによって、相互の理解や交流を深めてきた。

本報告書は、平成 28 年 10 月に開催された「平成 28 年度全国公立大学学生大会 LINK topos」についての概要をまとめたもので、それ以前の大会や、次の段階に進むために行動を開始していることについても触れている。

I 平成 28 年度全国公立大学学生大会 LINK topos の概要

1 大会プログラム

■1日目 10月8日(土) -オープニング(ポスターセッション) -

時間	活動内容	場所	備考
16:00	集合	小倉駅北口	
16:30~	バスで移動	(移動)	
17:00~	受付	北九州市立玄海青年の家	
17:30~ (30分)	入所式		
18:00~ (40分)	夕食		
19:00~ (90分程)	交流会		
22:30	就寝		

■2日目 10月9日(日) -メイン(シンポジウム・ワークショップ) -

時間	活動内容	場所	備考
6:30~	起床	北九州市立玄海青年の家	
7:00 (60分)	朝食		
8:20~ (40分)	バスで移動	(移動)	
9:15	会場到着	まなびとESDステーション	
9:30~ (30分)	大会の概要説明		
10:00~ (90分)	シンポジウム (パネルディスカッション)	まなびとESDステーション	

11:30～ (60分)	ワークショップ①		シンポジウムの振り返り
12:30～ (90分)	昼食	まなびとESDステーション	※グループごとに自由行動。
14:00～ (160分)	ワークショップ②		
16:40～ (40分)	ワールドカフェ		
17:20～ (60分)	ワークショップ③		
18:30～ (45分)	夕食(片付け)		
19:30～ (40分)	バスで移動	(移動)	
20:10～	自由時間	北九州市立玄海青年の家	※入浴時間も含む
22:30	就寝		

■3日目 10月10日(月) -クロージング(学長会議合同セッション) -

時間	活動内容	場所	備考
7:00～	朝食・準備	北九州市立玄海青年の家	
8:30～ (40分)	バスで移動	(移動)	
9:30～ (20分)	最終確認	北九州市立大学 多目的ホール	
9:50～ (80分)	発表会	北九州市立大学 多目的ホール	
11:10～ (20分)	会場準備		
11:30～ (130分)	ランチ交流会 ポスターセッション		
13:40～ (20分)	準備 移動	(移動)	

14:00～ (50分)	学生大会報告	A101	・大会の活動報告
14:50～ (10分)	準備 移動	(移動)	・休憩も含む
15:00～ (70分)	振り返り	北九州市立大学 多目的ホール	
16:20～ (10分)	クロージング		
	解散		

2 活動内容とその成果

2.1 事前交流会 <アイスブレイク&ポスターセッション>

目的と狙い

- ・参加者の関係性を高め、意見交換を活発化させる。
- ・参加者同士の「絆」を深める。

詳細

最初にアイスブレイクとして、「数集まり」というゲームを行った。これは、手をたたいた数やカテゴリーなどで集まるゲームで、声を掛け合いどれだけ早く集まれるかを競うものである。今回は「誕生日」をテーマにし、誕生日の月が同じ人同士が集まり、グループ分けを行った。そのグループで自己紹介をし、次のメインゲームのために、各チームの雰囲気をもて温めた。

メインゲームは「体じゃんけん」を実施した。チームメンバー全員で、体全体を使ってグー・チョキ・パーを表現し、チーム対抗のトーナメント形式により優勝チームを決定した。チーム全員が座ればグー、全員が立てばパー、中央の2人が立って後の全員が座ればチョキというルールで、チーム内で何を出すか話し合った。ゲームはとて盛り上がり、チーム内だけではなく他チームとの交流もあり、より多くの人と顔見知りになり、「絆」を深めることができた。目的以上の達成感で、幸先が良いスタートとなった。

その後、参加者が持ち寄ったポスターを使った交流が行われた。

参加者の感想（事後アンケートより抜粋）

<アイスブレイク>

- ・アイスブレイクの達成すべき目的（コミュニケーションの円滑化、議論に対する姿勢の向上）が明確であり、満足感が大きかった。しかし、初日にアイスブレイクで築いた関係が、翌日の活動になんら関係がなかったのはもったいなかったと思う。
- ・体を使ったり、心理的なアイスブレイクで面白かった。今後自分がアイスブレイクをリードする際に参考にしたいです！

<ポスターセッション>

- ・学生同士のポスターセッションは時間が限られていたのもっと長くゆっくりやりたかったと思います。
- ・今回初めて時事テーマ的な『熊本支援ブース』がありましたが、可能であれば来年以降も共通として取り上げられるコーナーがあればいいと思います。
- ・学内 LINK topos を行っている大学も増えてきたので、学内 LINK topos コーナーを設けて、他大学の参考になるようするなどでできればいいと思います。
- ・他の大学（特に自分たちと異なる学部、学科）の人たちがどんなことをしているのかを知ることができ、刺激を受けました。



図1 事前交流会でのアイスブレイク

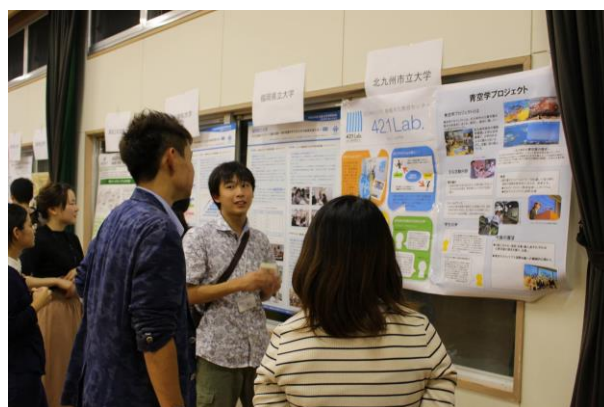


図2 事前交流会でのポスターセッション

2.2 シンポジウム

目的と狙い

- ・大会開催地である北九州市で行われている地域活動について知る。
- ・大学側、学生側から見た地域活動だけではなく、行政・民間・地域住民それぞれから大学及び学生がどのように見られているのかを知る機会とする。
- ・北九州での事例を通じ、参加者自身の「地域」をふりかえる比較材料を提供する。

詳細と講演内容

テーマ：「大学生が地域にはいり大人といっしょに成長すること」

主に北九州市立大学の地域共生教育センター（通称：421Lab.）が、地域住民と連携しながら、地域活動を実践することを通して得た学びや、大学生が地域活動に関わることで感じた地域の変化を参加者に紹介し、成果と課題を踏まえ、今後全国の公立大学の学生が活躍する地域における産学官民による連携体制のあり方を、行政・民間企業・地域住民・大学生という立場から議論を試みた。

詳細

<登壇者>

・西本 輝彦 様

（北九州市 市民文化スポーツ局 安全・安心推進部 安全・安心推進課 地域防犯係 主任）

・井上 龍子 様

（八幡駅前開発株式会社 社長）

・原田 祐児 様

（北方市民センター 館長）

・大庭 亜美 様

（北九州市立大学 地域創生学群 地域マネジメントコース 3年）

<司会進行>

前田 謙

（北九州市立大学 文学部 3年）

<議題>

- ①自己紹介（活躍フィールド／学生との関係性など）
- ②それぞれの視点で抱く、北九州市の概観・地域課題
- ③「地域に“学生”が入り活躍すること」に対する意義や自身へのメリット
- ④セクター（産学官民）間の連携による課題点や工夫しているポイント
- ⑤これから目指していきたいセクター間連携の姿

成果

開催地である北九州市において、北九州市立大学は先進的な取り組みを行っているため、そうした事例を知ることができたことが多くの参加者から良い学びとして挙げられている。さらに、行政・民間企業・地域住民・学生それぞれの視点からパネルディスカッションを行うことで、普段自分がかかわっている地域と照らし合わせて相手がどういう視点を持っているのかを知る貴重な機会となった。

反省

登壇者の活躍フィールドに基づく、北九州市の事例紹介のような形にとどまってしまった。パネリスト同士のクロストークがより活発に行われ、課題や悩みなどさらに深いパネリストの本音を聴くことができると、さらに良いシンポジウムになったと考える。この点は、次大会へ活かしていきたい。

参加者の感想

- ・初めて訪れた北九州という場所に焦点を当て、様々な立場の人の話を聞くことで、『地域ってそもそもなんだろう』、『学生として地域に入ることって……？』などと普段なかなか考えなかったようなことを自分の中で（また他地域の学生と一緒に）考えることができた。
- ・良い点ばかり、理想論ばかりだったような気がする。課題や悩みもじっくり聞きたかった。



図3 パネリストの様子



図4 参加者からの質問の様子

2.3 ワークショップ（以下、WS）

目的と狙い

- ・立場や地域を超えた他者との協働を通じて、新しい発見や気づきを得ること。
- ・立場や地域を超えた他者との関係性をつくること。
- ・WSの学びを参加者自身の地域活動に還元すること。

実施内容

テーマ：「わくわくする地域の未来を考えろ！！」

- (1) WS開始にあたっての導入説明
- (2) マインドマップを用いて、自身と関わりの深い「地域」について共有
- (3) 「わくわくする未来」を実現する方法をグループで企画

大学・学年・学部が異なる学生と教職員で5-6名のグループを構成した。また今回のWSでは、上記のような抽象的なテーマのWSとして自由度の高いものになるよう設定した。

<思考のプロセス>

- ① 実現したい未来を設定（付箋を使って書き出し）
- ② 企画の具体化
- ③ ワールドカフェ
- ④ 5W1H に沿って企画をまとめあげる



図 5 WSの様子①

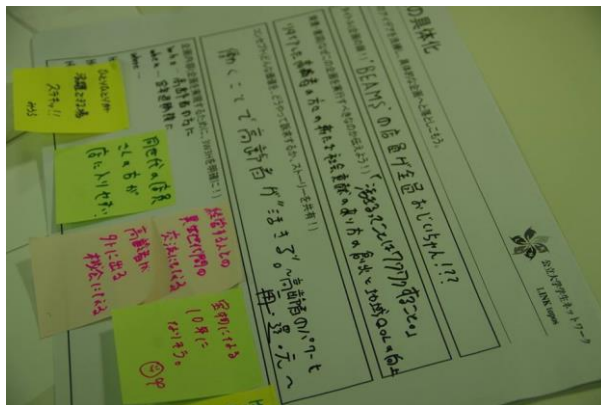


図 6 WSの様子② 付箋をつかったメモ



図 7 WSの様子③



図 8 WSの様子④ 具体化した企画内容

⑤ 発表練習

- ・企画を発表、最優秀賞と優秀賞を選出



図 9 発表前の様子



図 10 発表練習の様子



図 11 発表の様子

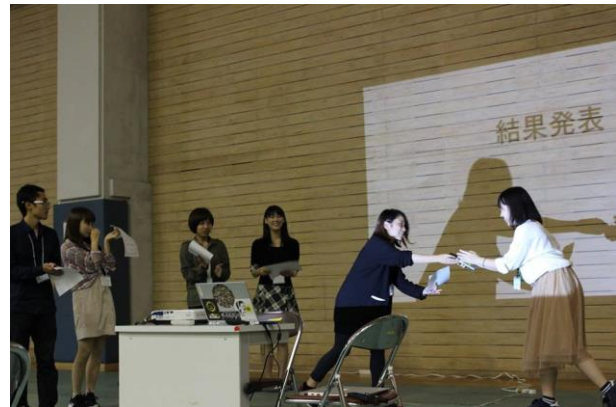


図 12 結果発表の様子

参加者の感想

- ・地域貢献ができる新たなビジネスなどテーマが面白いと思った。
- ・メンバー全員がとても面白く個性的で本当に楽しかった。賞が取れなかったことが本気で悔しかったです。今まででいちばん楽しいワークショップでした。
- ・いろいろな人の視点や考え方を多く知ることができ、自分の視野を少しでも広げることができました。
- ・同じ班の先生にアドバイスをいただき、細かい内容まで詰めることができた。
- ・ひとりで考えるとどうしても狭い視野で考えがちだが、他の分野で活動するみなさんの意見を聞くことで視野が広がり、新しいアイデアが生まれるということを学びました。
- ・WSの進め方の難しさを学び、人の意見を引き出すのはどうすれば良いかを学んだ。
- ・大変ではありましたが初対面の人と2日で1つのものを作り上げる経験はなかなか無いのでいい経験になりました！
- ・様々なバックグラウンドを持つ初対面の学生・教員・職員で話し合うからこそ、多様なアイデアが出てきたのだと思う。また、なかなか意見を真剣にぶつけ合う機会がないので、こんなにも多くの人が地域に対して熱い思いを持っているのだと感じた。

成果

他者との協働を通して、様々な視点や考え方・思想から学ぶという点においては、普段の地域活動では経験できない良質な機会になった。また関係性づくりの観点では、グループ内においては活発なものになった。抽象度の高いテーマ設定では、具体化するのが難しい一方で、考える余地を楽しむメンバーも多かった。多様な立場や地域の人とひとつの成果物を出すためには、粘り強いチームワークや詳細な論点の整理が必須であることを学べ、新たな知見を得ることができたと思う。

申し送り

今回の WS の参加学生は、年次が学部 1 年生から修士 2 年生と幅広く、また専攻領域は建築デザイン・看護・福祉・経済・工学など広範囲で、活動はまちおこし・地域医療・地域福祉・防災・被災地支援など多岐に渡っていた。知識量の違いや活動の濃淡があり、学生の共通項が「地域に関心がある」という中で、各自の活動とは切り離れた、ひとつの抽象的なテーマについて議論することの楽しさと同時に難しさを感じた。

次年度は、大会の目的から逆算して特に以下の内容を再考察する必要があると考える。

①大会全体を通しての WS の役割・位置付け・目的・目標

例えば、各団体からアジェンダを持ち寄って、それに対するアイデアを募集する場・学生との交流に重きをおいた場に設定するなど。

②WS の時間

グループ内で考える時間を十分にとって、他の人との接点が欲しかったという意見が多く聞かれた。また夜通し成果物を作成したため、グループ外での交流時間が減った。

2.4 学長・学生合同セッション及びランチ交流会

目的と狙い

- ・学生の意見、考えによって公立大学のミッションである地域貢献活動に寄与する。
- ・全国から集まった学長先生に対して、本大会の重要性と継続性を伝える。

プログラムの詳細

○ランチ交流会、ポスターセッション

学生大会の参加者と学長会議に参加した学長先生が一緒になって昼食をとりながら交流を行った。その前後にポスターセッションを行い、学長に向けて各公立大学の地域貢献の取り組みについて自由に発表、意見交換を行った。（このポスターセッションでは、事前交流会と同一のポスターを用いた）

○大会報告：小笠原果美 公立大学学生ネットワーク代表（岩手県立大学）

参加者の感想

- ・LINK topos の動きがどのように生まれ、どのように発展してきたのか再確認することができました。参加している学生、教職員、学長が一堂に集まる場で学生代表が LINK topos について報告することは非常に意義があることだと思う。
- ・本学のボランティアセンターが開設一年目であったことに加え、私自身のボランティア経験も少なかったため、どの大学の発表も非常に刺激的であり、斬新であったと思う。
- ・『地域にかかわる』という意味としては同じであるにも関わらず、地域のかかわり方が

各大学それぞれで、考えたことのない観点からアプローチしているものが多く、すごく興味深いものばかりで、すごく考えさせられた。

- ・他大学の学長先生にも発表を聞いてもらえる機会があり、貴重な意見をいただけた。

成果

<学長会議との合同セッション>

本セッションにおいて学生代表からの発表に対する感想として、学長先生や樋口尚也文部科学大臣政務官から、「LINK topos というネットワークは今後も必要だ」、「素晴らしい取り組みだ」といった意見を頂いた。4年目の本大会において、学長先生方から「LINK topos」と自然に呼んでいただくほど浸透してきたということが、これまでLINK toposを継続・発展させてきた成果だと思う。学長先生の中で本大会に対する理解が広がりつつあることを感じられた。

<ランチ交流会及びポスターセッション>

今回はポスターセッションの時間を大幅に取ることで、学長先生や参加者が他大学のポスターを見る時間が例年以上に確保できた。このことによって、参加者の学生にとって普段話す機会のない学長先生に直接、自分たちの活動を報告できたため、モチベーションの向上に繋がったと考えられる。また、ランチ交流会では、前年の反省を活かし、あらかじめ各テーブルに学長先生方の座席を2,3席確保し、しっかり学生と交流できる工夫を行った。このことで、ポスターセッションでお話した学長先生のみならず、自大学や近隣地域の大学などの複数の学長先生と交流できた。



図 13 学生代表による大会報告



図 14 ランチ交流会の様子



図 15 ポスターセッションの様子①



図 16 ポスターセッションの様子②

2.5 大会を通して

参加者の心境の変化（参加者の感想より）

- ・初めて参加したのですが、とても貴重な経験をすることができました。全国の学生と出会い、活動を行って、新たなつながりを持つことができた今回の経験は大切にしたいと思います。後輩たちにも繋いでいきたいです。
- ・今までの勉強会は、その直後だけ爆発的にモチベーションが上がって、すぐに消えていきましたが、LINK topos では、全く違いました。
- ・『全国に同じ意識を持った仲間たちがいるんだ！』という自信や勇気が生まれていて、どこか静かにフツフツとやる気が湧いてきているという感じです（すこぶる抽象的です笑）。残り1年半の大学生活はもちろん、これからの人生でも大きな節目になったと思います。貴重な機会をいただきありがとうございました。
- ・学長さんと話をできた経験は非常に貴重なものだった。学長さんと学生をつなぐ、そんなリンクトポスにもなったのではないかと思います。
- ・年に1回のお祭りではなく、各地域が盛り上がり、日本を盛り上げるイベントとして各地区ごとへのサポート体制も確立できればさらに普及するのではないかと思います。
- ・単科大学で看護学部という、今まで医療のことばかりを考えてばかりいた私にとって、地域で何かしたいという思いや、時間がない、一緒に動いてくれる人がいないと焦ってばかりでした。そのなかで、今回このリンクトポスに参加することができて大きく視野は広がりました。そして、自分の分野からしっかりアプローチすることの必要性を感じることができました。時間は迫っている中で少しでもこれから発信していけるようになりたいと思っています。この機会を発信し作っていただけて感謝しきれません。私にとってこの時間は忘れることのできないものになると思います。ありがとうございました。

成果

本大会では、LINK topos の原点である「つながる」ということを中心的なテーマとした。ポスターセッションの時間を大幅に取ったことも、このテーマに沿って全国各地から集まった参加者の交流を促す目的があった。ただ、参加者の感想として、「もう少し時間がほしかったです!」という意見があったことは、全国各地で公立大学が行っている地域活動を知り、地域活動において熱心に取り組んでいる学生・教員・職員と様々な意見交換を行うことに多くの参加者が重要性を実感している結果だと考える。

今大会で大きな成果と言える点は、4年目にして LINK topos という言葉が着実に浸透してきているということである。LINK topos の立ち上げ時には、「継続できるか、疑問・・・?」という声もあったが、今回多くの学長先生に自然に LINK topos と言ってもらえたことはこれまで3年間の活動の賜物である。各方面の多大なるご支援・ご指導のおかげと思う。

最後に、今大会は「つながる」というテーマのもと、大会後の動きとして地区ブロックごとのつながりを作る工夫をした。具体的には、クロージングのタイミングで地区ブロックごとに集まり、これからできることをそれぞれ話し合う時間を設けた。また、宿泊の際の部屋割りを地区ブロックごとに割り振った。この結果、ほとんどの地区ブロックで地区ミーティング開催の動きが始まり、地区 LINK topos の開催が準備されている。こうした動きは、これまでネットワークとして構想はあっても実現していなかった動きであり、今大会の大きな成果だと言える。

3. 参加者の対象と推移

今回の全国公立大学学生大会には地域貢献活動や研究を行っている学生団体、サークル、ゼミ等の学生、もしくはそれらに興味を持つ学生、教員、職員が参加した。また過去の公立大学学生大会への参加者数は、平成24年度は24大学47名、平成25年度は34大学81名、平成26年度は33大学104名、そして、平成27年度は27大学93名と推移している。

今大会においては、過去最大の38大学119名が参加した。また、参加者数とその内訳について、地区別参加者数を以下にまとめた。今年度も100名以上の参加者が全国から集まった。大会の、今後の継続開催の必要性を強く感じさせる結果となった。

以下、「A.学生大会参加者の推移」「B.地区別参加者数の推移」「C.エリア別参加大学数(全4回大会の合計)」としてグラフで示す。

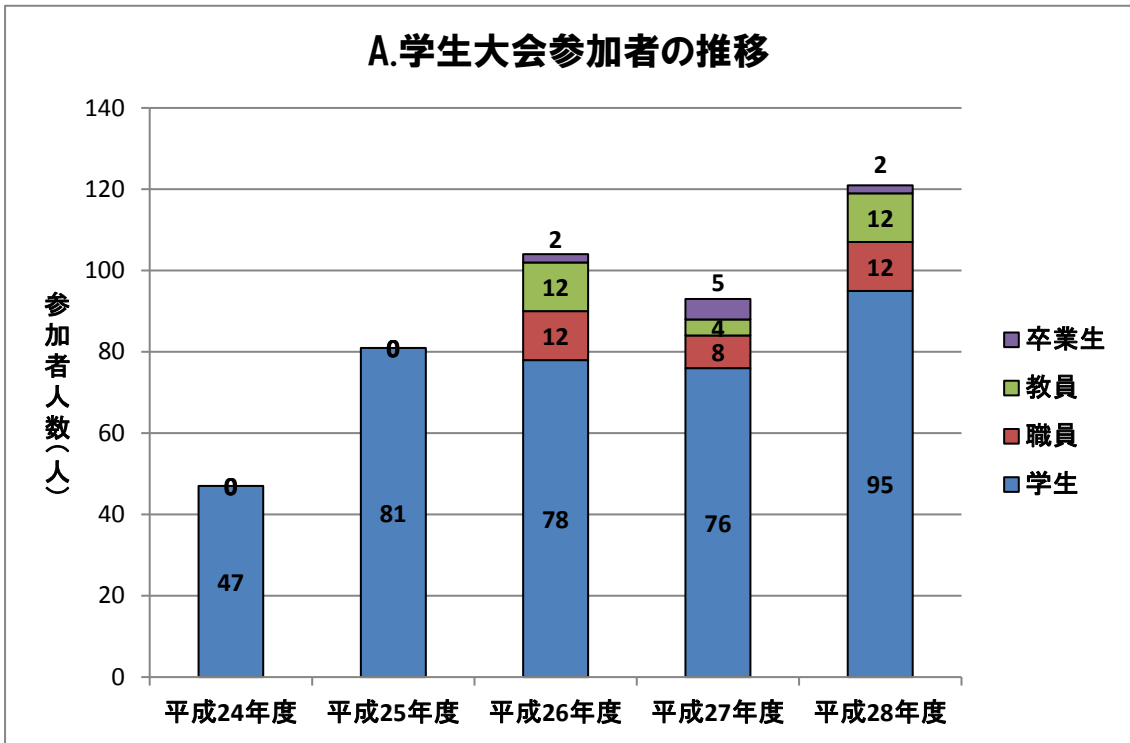


図 17 学生大会参加者数の推移

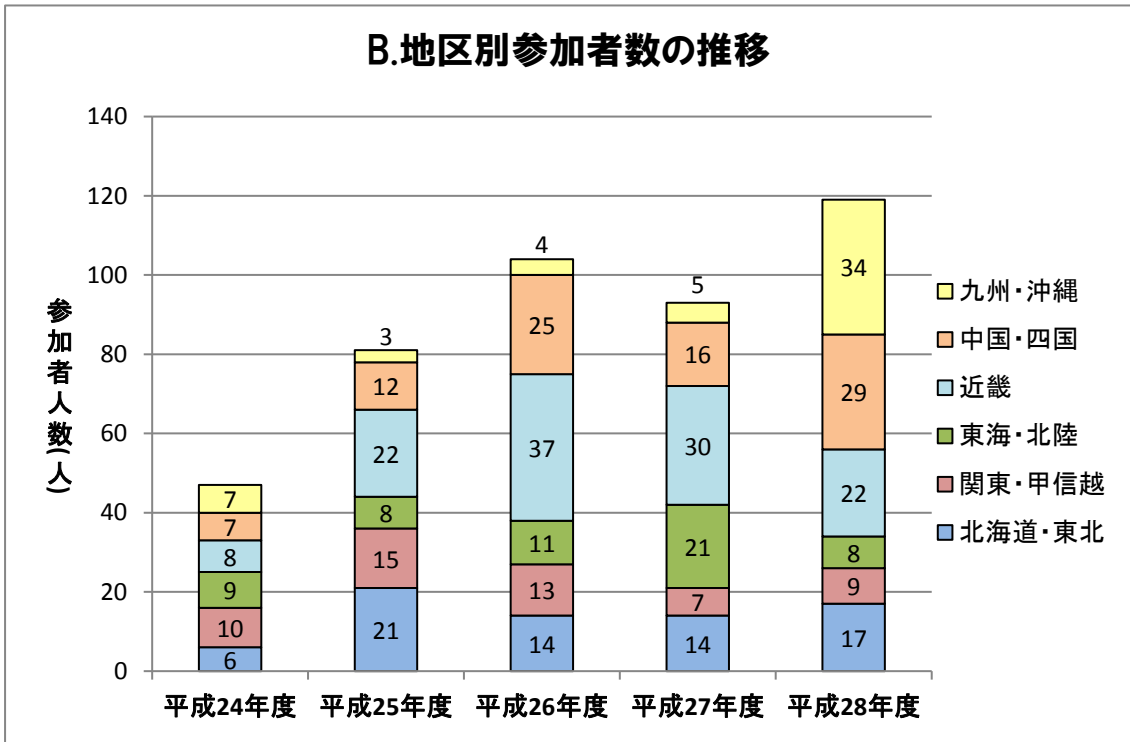


図 18 地区別参加者数の推移

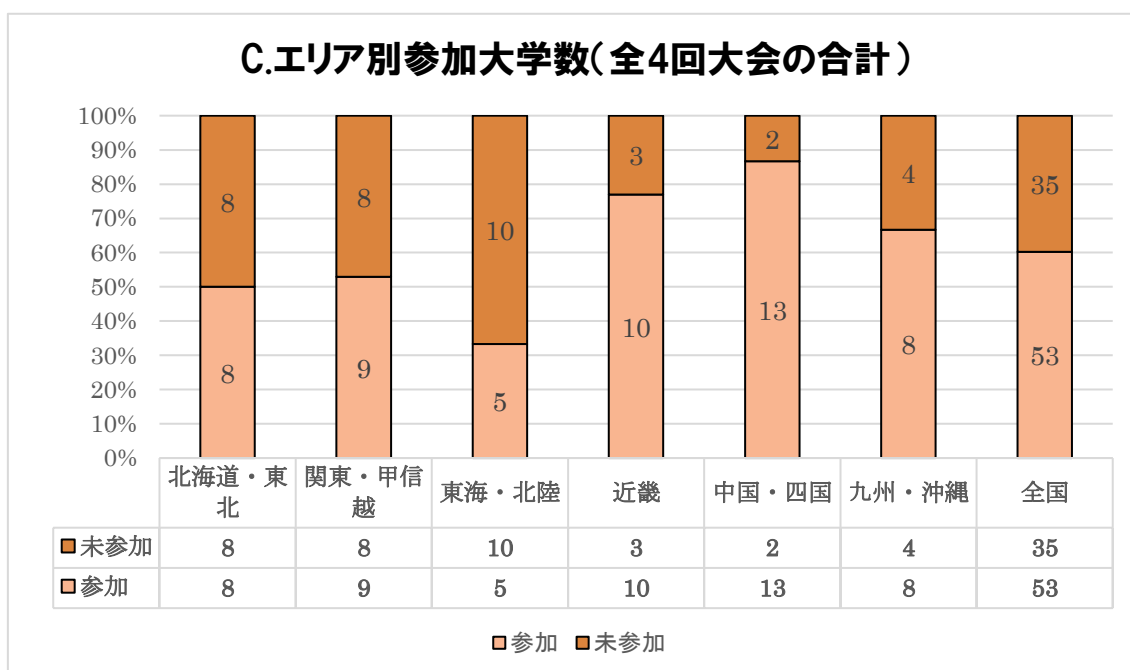


図 19 エリア別参加大学数 (全 4 回大会の合計)

4. 全国公立大学学生大会の今後の展望について

今年で 4 回目の開催である本大会は、過去最多の 38 大学から参加者が集まった。しかしながら、全国の公立大学数 88 から見ると半数に満たない状況である。また、告知や開催情報における今大会の趣旨から判断して不参加となった大学や、費用の面から不参加とした大学の他に、そもそもこの全国公立大学学生大会の情報が、興味のある学生や担当している教職員に届いていない場合もあることがわかった。以上のことを考えると、まずは全国すべての公立大学の学生・教員・職員が、本大会を知って参加する環境を整えることを今後の目標としたい。つまり、全国すべての公立大学に適切かつ確実な情報を届け、そこから各大学が状況に応じて参加・不参加を選択できる環境を整えることが課題と考えられる。これを前提として、より多くの参加者が集い、活発な大会となることで、学生ネットワーク及び学生大会の質向上を目指していきたい。

さらに、本大会では地域ブロック内の参加者が繋がることを一つのテーマとしたが、これは、前年度の報告でも取り上げられたもので、年に 1 度の全国公立大学学生大会に加え、地区ごとのネットワーク強化や具体的な地域特性に沿った実践的なワークショップを図る地区大会の実施を目標としたためであった。平成 28 年 12 月末の時点で、九州・沖縄、東北、近畿、関東・甲信越の 4 つの地区において地区ミーティングが開催され、4 つの大学（高崎経済大学、高知県立大学、岩手県立大学、名古屋市立大学）で、学内報告会または学内 LINK topos の開催に至っている。地区ブロックまたは各大学における活動が活発化しており、さらなる学内 LINK topos の浸透と、地区大会の検討及び開催を進めていきたい。

5. 謝辞

平成 28 年度全国公立大学学生大会 LINK topos の開催に際して、ご指導・ご支援をいただきました公大協ワーキンググループ委員の先生方、公大協事務局職員の皆様、そして会場運営に協力して頂きました北九州市立大学の学生・職員の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今年度で 4 年目となりました本大会も盛況のまま終わることができたのは、参加して下さった学生・教職員・学長の皆様の協力と理解があつてこそだと思っています。改めて協力していただいた多くの皆様へ、心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

平成 28 年度 公立大学学生ネットワーク

代表 岩手県立大学 4 年 小笠原 果美

副代表 大阪府立大学 3 年 片山 直也



図 20 LINK topos2016 参加者

II 補足

ー公立大学学生ネットワークのこれまでの歩みー

はじめに

平成 28 年 10 月 8、9、10 日に北九州市立玄海青年の家、まなびと ESD ステーション及び北九州市立大学(北方キャンパス)で平成 28 年度全国公立大学学生大会 LINK topos 2016 in Kitakyushu が開催された。本大会には全国の公立大学より学生、教員、職員 119 名が参加した。そして今年度は、ポスターセッションの内容を、防災活動や地域活動に加え、広報活動など大学と学生が連携した活動まで広げることで、参加大学の増加を図った。また、ワークショップにおいては、「わくわくする地域の未来を考えろ！！」と題して、2030 年という地域の未来を考えるフューチャーセッションを行った。本大会を通して全国各地から集まった学生、教員、職員が多様な価値観に触れ、学び合うことで、つながることの意義を改めて実感する機会となった。

以下、公立大学学生大会が開催された経緯や背景、公立大学学生ネットワークをきっかけに生まれた取り組みを補足として記す。

1 公立大学学生ネットワーク結成の背景とその概要

平成 23 年 3 月の東日本大震災の発生後、全国の学生ボランティアが被災地の復興支援活動を行ってきた。そして公立大学においても同様の動きがあり、全国の各地区から被災地に向けて活動が展開された。そのような学生の活動成果を公立大学全体で共有するために、平成 24 年 11 月に静岡県立大学で公立大学学長会議特別シンポジウム及びワークショップ「公立大学学生による被災地支援と地域防災活動」が開催された。そこで初めて学長会議という場で学長と学生が直接、意見交換が行われた。その学長会議に参加した学生らが中心となって、公立大学学生ネットワークが結成された。当初、これに加わる団体として被災地支援・地域貢献活動を行う学生主体の団体を対象としていたが、現在では地域貢献活動を行う学生やその団体まで対象を広げている。

公立大学学生ネットワークの目的は、学生間の交流、情報交換等を通して学生の地域における活動の促進、向上、そして活動を行う上での課題等の解決のための情報共有である。現在、全国の公立大学生約 150 名が Facebook グループを介して参加している。

2 過去の全国公立大学学生大会 LINK topos について

○平成 25 年度 LINK topos - 岩手県立大学 -

第 1 回目の開催となった大会は、文部科学省から後援をいただいた。テーマには「大学／学生と地域コミュニティの協働をデザインする」が選ばれ、34 大学 81 名の学生がシンポジウム及びワークショップに参加し、公立大学長と意見交換を行った。



図 A1 大会参加者



図 A2 ワークショップの様子

○平成 26 年度 LINK topos - 兵庫県立大学 -

平成 26 年 10 月には、第 2 回目の大会が兵庫県立大学の本館及び「人と防災未来センター」で開催された。この大会では、「大学／学生と地域コミュニティの協働をデザインする」をテーマとした。前年と同様に地域の未来について考えるワークショップ、シンポジウムを実施し、公立大学長との意見交換が行われた。また、この大会では学生に加えて参加対象者に教員と職員を加えた。そのため大会テーマであり、本大会の意義でもある「学生・教員・職員の協働」について、より実感を持って理解や交流を深めることができた。平成 26 年度大会では前年を上回る 33 大学 104 名の参加者が集まった。



図 A3 大会参加者



図 A4 ワークショップの様子

○平成 27 年度 LINK topos - 名古屋市立大学 -

平成 27 年 10 月、3 回目の大会は名古屋市立大学及び愛知県青年の家で開催した。この大会では、「地域を考える学生・教員・職員の理想的な協働体系と地域課題の解決に向けた取り組み」をテーマとした。例年と同様に地域の未来について考えるワークショップ、シンポジウム、公立大学長と意見交換が行われ、「地域コミュニティ」と「防災活動」の 2 つのテーマを事前に参加者に選んでもらい、それに沿ってグループ分けを行ったことで、より深く具体的なディスカッションを行うことができた。平成 27 年度大会では、27 大学 93 名の参加者が集まった。



図 A5 大会参加者



図 A6 ワークショップの様子

3 これまでの取り組みの成果

① 地域創造学習プログラム（岩手県立大学）

平成 25 年度より岩手県立大学では、岩手県内の対象となった市町村でフィールドワークを行う「地域創造学習プログラム」という課外活動が行われている。その目的は、フィールドワークを通して学生（1.2 年生）が岩手という地域を知り、その地域に根付くこと、そして主体的かつ能動的な学びを促すことである。

平成 26 年度より、第 1 回目の LINK topos に参加した学生がこのプログラムに参画することとなり、教職員のサポートの下、企画・コーディネートを担うことになった。

平成 25 年度にはフィールドワークのコースが 2 コースしかなかったが、平成 27 年度には 8 コースまで広がり、学生の地域への学びを深める場として大きく期待されている。平成 28 年度には、単位化され、授業として大学のカリキュラムに組み込まれることとなった。第 1 回目の LINK topos で提案されたもののひとつで、具体的な授業として取り上げられたものである。



図 A7 地域創造学習プログラム



図 A8 ワークショップの様子

② おなかまプロジェクト（神戸市看護大学・神戸市外国語大学）

このプロジェクトは平成 25 年度の大会のワークショップで提案されたアクションプランのひとつで、自治会長と学生が一緒にお鍋を囲むことで、双方が交流するというものである。

この企画は、大学周辺に住む地域の人たちと交流する機会がない大学生に対して、地域に根付き、そこで暮らす人たちと交流を促すことを目的とされ、「おなかまプロジェクト」と名づけられた。

平成 26 年度に、神戸市看護大学・神戸市外国語大学の学生が中心となって具体化された。両大学が立地している兵庫県神戸市西区学園西町の自治会の方々と一緒に行われたことは、大きな成果として報告された。平成 28 年の冬に神戸市看護大学の学生が中心となり第 2 回目を実施予定である。



図 A9 おなかまプロジェクト①



図 A10 おなかまプロジェクト②

③ 学内 LINK topos の開催

これは、LINK topos を特定の大学内や周辺地域に焦点を当てて開催する取り組みで、大学内の学生、教員、職員の繋がりや創出、それらの連携の強化が目的としている。

平成 28 年度時点で、大阪府立大学で 1 回、岩手県立大学で 4 回、高知県立大学で 3 回、名古屋市立大学で 1 回、高崎経済大学で 1 回行われた。その集まりでは、大学周辺の地域や大学そのものに関する課題をテーマとしたワークショップや交流会が行われた。また、必ずしも全国大会の内容に沿ったプログラムではなく、その地域や大学、参加者のニーズに合わせて工夫を凝らしている点が近年の特徴として挙げられる。そこで、平成 28 年度初めて学内 LINKtopos を開催した高崎経済大学の例を詳しく紹介する。



図 A11 大阪府立大学学内 LINK topos



図 A12 岩手県立大学学内 LINK topos

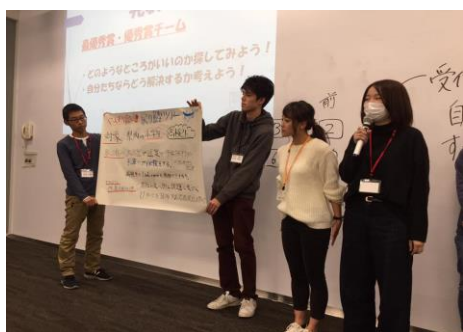


図 A13 高知県立大学学内 LINK topos



図 A14 名古屋市立大学学内 LINK topos

例) 高崎経済大学 LINKtopos2016 (執筆: 高崎経済大学 石井 理、石川 樹)

● 第1部 参加学生による報告

LINKtopos2016に参加した学生により、LINKtoposについての概要説明を行い、さらに北九州でのプログラム内容の紹介、そしてポスターセッションで発表したことについて共有をしました。その後発信した内容を受けて、他団体からどのような反響があったのかも紹介しました。そして他大学の学生がそれぞれの地域でどのような環境で活動を行っているのか、事例の紹介をし、最後にLINKtoposで得ることのできた成果を報告しました。

● 第2部 LINKtopos2016のワークショップを再現

第1部での報告を受けて、実際に報告会に参加した学生に同じテーマを高崎の街に置き換えたものである「すこぶるわくわくする未来の高崎のビジョンを圧倒的解像度で打ち立てろ!」というテーマでワークショップをし、LINKtoposの疑似体験をしてもらいました。



↑ 第1部の様子



↑ 第2部の様子

● ワークショップの発表会

報告会から1週間経った日に、前回行ったワークショップの発表会を行い、実際に未来の高崎のビジョンを発表する場を設けました。多くの大学関係者様もお見えになり、その中で学生たちが練ったアイデアをぶつけました。



↑ 発表会の様子



↑ ワクワクしたグループへの表彰

④ その他

公立大学学生ネットワークでは、平成 26 年度大会後に一部の地区では地区代表を置くなどの体制を作り、会議や大学合同のイベント企画なども行った。



図 A15 LINK topos MTG



図 A16 OBOG を交えた MTG (仙台)